

## 論文の和文要旨

論文題目

二格の名詞と動詞からなる連語について

氏名

李丹

本論文は連語論研究のひとつの試みとして、連語そのものの分類にとどまらず、連語の体系を明確に示すという視点から、奥田（1962[1983]）の「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」を整理しなおし、発展させようとするものである。

「連語」はただ2つ（あるいは3つ）の単語をくみあわせた（本論文で言えば二格の名詞と動詞をくみあわせた）だけでなく、2つ（あるいは3つ）の単語の間にある種の関係（本論文ではこのような関係を「むすびつき」と呼ぶ）があって、それに従ってある構造をなしているのである。例えば「新宿に行く」と「買い物に行く」のように、その構造が変わることで、すなわちここでは二格名詞が場所名詞（「新宿」）か動作性名詞（「買い物（する）」）かによって、ある1つの連語から他の連語に移行したり、他の連語を派生したりすることがある。このような関係によって連語は一つの体系をなしている。この点においては、連語の研究は単なる格助詞あるいは動詞の結合価の研究などとは大きく異なる。

二格の名詞と動詞からなる連語は、二格の名詞と動詞の関係および二格の名詞と動詞とのそれぞれの意味的な性質（本論文では「カテゴリーカルな意味」として考える）によって分類し、さらにそれをもとにした体系化ができる。これは奥田靖雄氏を中心に研究が行われてきた「連語論」の方法であり、特に奥田（同）は、二格の名詞と動詞の連語に関する唯一の先行研究として挙げられる。しかし、奥田（同）にはいくつかの問題点があり、再考の余地が十分にあると思われる。そのうち、特に連語論の最終目的の一つであると言える連語の体系化には、奥田の同論文は結果的に至っていないと言えよう。

本論文の目的は、二格の名詞と動詞からなる連語が表わすいくつかのむすびつきの記述にとどまらず、連語の体系化を図ることである。具体的に、二格の名詞と動詞からなる連語について、奥田（同）を再考した上で、大量のデータに基づいて考察することによって、その構造的なタイプのあり方の記述を試みる。それをもとにして、連語の間の移行・派生などの相互関係を考え、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。

まず、第1部「序論」の第1章では、本論文の目的、研究の対象および本論文で扱うデータについて述べる。最後に、本論文の構成を示す。

第2章では、格助詞「ニ」、二格の名詞と動詞との関係、二格の名詞を含む連語論といった観点から、それぞれの先行研究を紹介し、本研究の位置づけを明確にする。本章では、奥田(同)を「体系化」と「構造」、連語論の対象、分類の妥当性という3つの観点から再考し、再考に対する改善方法を示す。その結果、本研究の任務として、「再分類」と「体系化」を設定できる。すなわち a) 二格の名詞と動詞からなる連語について、奥田(同)の問題点を改善し、分類の再編成を行う。b) a) の分類をもとにして、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。

第2部「二格の名詞と動詞からなる連語の分類」では、二格の名詞と動詞からなる連語が表わすいくつかのむすびつき、そのむすびつきの性格および実現する諸条件などを記述する。二格の名詞と動詞からなる連語は、二格の名詞と動詞とのむすびつき方、および名詞と動詞のカテゴリカルな意味によって、まず〔対象的なむすびつき〕と〔規定的なむすびつき〕の2つに大きく分かれる。

第3章では、〔対象的なむすびつき〕を取り上げる。〔対象的なむすびつき〕に、〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕〔相手のむすびつき〕〔社会的なかかわり〕〔心理的なかわり〕〔関係のむすびつき〕〔働きかけのむすびつき〕〔受身的なむすびつき〕の9つの下位分類がある。そのうち、〔ありかのむすびつき〕はさらに〔存在物のありか〕〔内在のむすびつき〕〔所有者のむすびつき〕〔所有物のありか〕〔認知物のありか〕〔出現物のありか〕〔消失物のありか〕の7つのタイプ、〔移動のむすびつき〕はさらに〔行く先のむすびつき〕〔着点のむすびつき〕の2つのタイプ、〔相手のむすびつき〕はさらに〔ゆずり相手のむすびつき〕〔はなし相手のむすびつき〕〔対面の相手のむすびつき〕の3つのタイプ、〔社会的なかかわり〕はさらに〔社会活動のむすびつき〕〔社会的状態変化のむすびつき〕の2つのタイプ、〔心理的なかわり〕はさらに〔態度のむすびつき〕〔認識のむすびつき〕〔知的なむすびつき〕の3つのタイプ、〔関係のむすびつき〕はさらに〔客観的な関係のむすびつき〕〔論理的な関係のむすびつき〕〔起源のむすびつき〕〔内容＝構成要素のむすびつき〕の4つのタイプにそれぞれ分けることができる。

第4章では、〔規定的なむすびつき〕を扱う。〔対象的なむすびつき〕に比べ大変少ないが、その下位分類として、〔結果規定のむすびつき〕〔内容規定のむすびつき〕〔目的規定のむすびつき〕の3つがある。

次に、本論文の中核である第3部「二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系」では、第2部での分類をもとにして、むすびつきの間にある派生や移行などの相互関係を述べ、二格の名詞と動詞からなる連語がなす体系を明らかにする。

第5章では、〔対象的なむすびつき〕と〔規定的なむすびつき〕との相互関係、すなわち〔規定的なむすびつき〕に属する3つのカテゴリーがそれぞれ〔対象的なむすびつき〕

とどう関係するかを詳しく述べる。二格の名詞と動詞からなる連語の体系において、〔対象的なむすびつき〕が中核的な存在であり、〔規定的なむすびつき〕はその周辺に位置する。

第6章では、〔対象的なむすびつき〕の各カテゴリーの間の相互関係を取り上げる。〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕の3つのむすびつきを中心に、この3つの間にはどのような相互関係があるのか、またこの3つが他のむすびつきとどう関係するかをそれぞれ述べる。〔対象的なむすびつき〕自体も一つの体系をなしており、そのもっとも中心的なものは〔ありかのむすびつき〕である。〔対象的なむすびつき〕において、〔ありかのむすびつき〕〔移動のむすびつき〕〔くっつきのむすびつき〕は具体的なものであり、〔相手のむすびつき〕を中間的なものとして、〔社会的なかわり〕〔心理的なかわり〕〔関係のむすびつき〕〔働きかけのむすびつき〕は抽象的なものになる。〔受身的なむすびつき〕も具体的なものであるが、その動詞の語彙的な意味の特殊性（受身的な意味をもっている）から、他のむすびつきとの直接的な関係を見出しにくい。

なお、むすびつきの間は主に以下の4つの方法を通じて関係している。

I) 動詞のアスペクトの変化：

動詞が文の中で「～ている」形、「～てある」形および受身形の「～ている」形（「～(ら)れている」の形）をとると、〔ありかのむすびつき〕のうちの〔存在物のありか〕と〔内在のむすびつき〕に移行しやすくなる。

II) 「～ていく」「～てくる」形：

動詞が文の中で「～ていく」形および「～てくる」形をとると、〔移動のむすびつき〕に移行しやすくなる。なお、前者は〔行く先のむすびつき〕に、後者は〔着点のむすびつき〕にそれぞれ移行する。

III) 二格の名詞がある特定の条件下において、あるいは二格名詞の抽象化によって、動詞が語彙的な意味のずれ＝抽象化を起こす：

具体的なものが抽象的なものを派生するか、具体的なものから抽象的なものに移行する。

IV) 動詞の語彙的な意味の多義性

具体的なものが抽象的なものを派生するか、具体的なものから抽象的なものに移行する。

最後に、第4部では、第7章で論文全体の結論をまとめ、第8章で今後に残された課題について述べる。